



星☆空すれいぶ

GLITTER BOOBS 2

乳屋

GLAMOUR WORKS

ADULT ONLY

新居に引っ越してきた星空家——

ひとり娘みゆきは、転校初日にクラスの男子達に輪姦されてしまう

以後クラスの性欲処理係として、毎日のように男子達の欲望のはけ口として地獄のような日々をおくる……

そして男子達のとどまることを知らない性欲は、みゆきの美しい母育代にも向けられた

星空家に入り込んだ少年達全員が育代の熟れた女体に向かって精を吐き出すまで一時間とかからなかった

今夜は夫は出張で帰らない——
獣たちに占拠された星空家での淫虐の祭は、これからクライマックスを迎えようとしていた……





「ビィッ！や、やめてえッ！」

奇しくも母娘のかすれた悲鳴が重なる
少年達に抑えこまれた二人は、尻を突き出す
ことを強制され、肛門を晒される

「二度やってみたかったんだよな」
少年達は陽気に会話しながら、あらかじめ
用意した洗腸器、牛乳パック、洗面器などを
手際よくならべ準備する
洗面器に牛乳が注がれ、それを洗腸器で
吸い上げて、母娘に向かって構える

母娘には、それを怯えた目で見つめる以外に
できることはなかった……



「いやッ！イヤアアアッ！」

「暴れんな！おいしっかり抑えろ！」
抵抗むなく母娘の白い尻肉は割られ、赤い
菊座に冷たい浣腸器の先端が突き立てられる
なんとか侵入させまいと固く閉ざそうと肛門
に力をいれるが、浣腸器に肉をかきわけられ
容易く突き刺さってしまう

「うあッ！あッ！」

「よーし、ゆっくりだ！ゆっくりと入れろ」
浣腸器のシリンドーがゆっくりと押され
母娘の直腸内を牛乳が満たしていく……

「うう……」

浣腸器11本分1牛乳2000ミリリットルを肛門に注がれた母娘は、恥辱と苦痛のうめき声を漏らすやがて下腹から水音のような感覚とともに鈍痛がわきあがってきた……

「お、お願い……トイレに行かせて……」

「ああ、トイレな？おまえらのトイレはこれだ」少年達は下卑た笑みを交わし合い、あるものを差し出す——それはバケツだった……

少年達が何を考えているのか理解した母娘は驚愕と羞恥に顔を引き攣らせる





「ああ……」
高まる排泄の苦痛に身を振らせながら
バケツひとつに脱糞を強制される母娘

「そうそう……二人一緒に出すんだぞ？」
「こぼしやがったら口で舐め取らせて
やるからな！外すんじゃねえぞ？」



「お、お母さん!! 押さないでえッ」
「ご、ごめんなさい、みゆき……んんッ!!」

母娘はまるで尻相撲のように押し合いながら
バケツの位置にあわせて発射体制に入る

「も、もうダメエッ!!」
ついに我慢の限界に達したのか、みゆきが
身体を震わせる……それに合わせるかの
ように育代もまた尻の緊張を解放した

まずは白く細い流れが吹き出し、すぐさま
それは茶色いモノを含んだ奔流へと拡大、
部屋をぶびゅぶびゅといったまぬけな音
と異臭で満ちた……

「うう……」
みゆきが嗚咽する
女として肉体のすべてを汚されきつた
そう悟ったがゆえの涙だった

「いやあ、どんな美人が出しても糞は糞だな！
臭えのなんの！」
母娘の出した汚物を捨てにいつていた少年が
そう言いながら戻ってきた

他の少年達は、二人の肛門を念入りに拭き
清め、揉みほぐしていた

それが終わると、ふたりはようやく解放さ
れ抱き合いながら腰を落とす
すると膣の奥から残った精液がとろりと
流れだした

「さて始めるか！」
「ま、まだ私達を辱める気なの……」
育代の怒りとも諦めともつかぬ呟きなど
誰も聞いていなかった



「も、もういい加減にして頂戴!!
どれだけ私達を嫩れば気が済むの!?!」
「お、お願い!...もうやめてえ!...!」

母娘の精一杯の怒声と哀願を聞いても
少年達の欲望にぎらついた眼光に変化
はなかった
再び硬直さを取り戻した肉棒が母娘を
取り囲む...





「あうう……」
再び少年達に押さえ込まれる母娘
繰り返される陵辱に疲れきった二人
は、もはや悲鳴をあげるくらいしか
できない
少年二人の指が、母娘それぞれの肛門
を開かせようとする
また洗腸されるのかと振り返った
母娘の見たモノは……





「ピッ!」
そこにあつたのは白く冷たい浣腸器では
なく、熱く脈打つ肉棒だった
制止の声をあげる隙もなく、それは母娘の
肛門処女を一気に散らした

「はははッ!親子そろってアナル処女喪失
した気分はどうよ星空あ!」
だが少年の鬼畜なセリフは、肛門を貫かれ
苦痛に泣き叫ぶ母娘には届いていないよう
だった……





「うぐっ！うぐっ！」
膣とはまた別の感覚で内蔵を圧迫する
激しい抽出に呻き声をあげる母娘

それは体内に熱い進りを放たれること
で唐突に終わる…
いや力を失った肉棒が引き抜かれると
肛門が閉じる隙すら与えられずに新た
な肉棒が挿入された

「せっかくのアナル処女喪失パーティー
なんだから全員で輪姦すからな！」



少年達は、全員がそれぞれ母娘の肛門を
存分に犯した

激しい抽出にあがる悲鳴、直腸に放たれ
る白濁液、痙攣する女体……

ようやくのことで、解放される二人

ぐったりと床に突っ伏した育代の上に
みゆきが覆い被さるように置かれる

段重ねにされた二人の股間が、別の生き
物のようにひくひくと蠢いていた……

「見ろよ、すっかりケツ穴が開ききって
金魚みてえにぱくぱく動いてら」





「ははっこりやエロいな！写真撮っておくか」
少年達の笑い声が響き、カメラのフラッシュが
母娘の尻を更に白く染め上げる
だが二人は、陵辱劇の合間に訪れたしばしの
小休止にただただ放心し続けるだけだった…



だが、そんな贅沢は長く続かなかった
少年のひとりが台所から夕飯用のズッキーニを
みつけると両側にコンドームを被せ即席の双頭
バイブに仕立てたのだ
「さすがに連続三発は疲れたな…
俺らが回復するまで二人でレズって
楽しませてもらうか」

「も、もうイヤアツッ！」
育代の股間にズッキーニが突き立てられ
もう片側をみゆきの股間にあてがう

みゆきは髪を振り乱し泣き喚く
「み、みゆきいッ！」

もう娘は限界だ…
この狂った宴に耐えられない…
そう判断した育代はひとつの
決心を固めた



「お願い！もう娘は…みゆきは許してやって！」
育代は少年達の前に這いつくばって懇願した
いま娘を救えるのは母親たる自分だけなのだ
恥も屈辱もなかった…娘を救えるなら自分は
どうなってもいい



「ん？それは、アレかな？おばさんが
星空の身代わりになるってこと？」

「え、ええ！」

わずかな希望が見えた育代は必死に
少年達に媚びを売る

「あ、あなた達が望むなら、いつでも
私が相手をするわ！どんなことでも！」

「そこまで言うなら考えないことも
ないけどさー」

少年のひとりが育代の頭に足を乗せ
ぐりぐりと踏みつける

「俺達の肉便器に志願するなら、それなり
の頼み方があるんじゃないのお？」

「そうそう、なるべくエロく無様にさ」

「……は、はい……」
育代に選択権はなかった

育代は必死に頭を働かせ少年達が喜びそうな
下衆く卑猥な文言を考える、
そしてソファアの上に乗り足をあげ、自らの
股間を目一杯に広げて少年達に笑いかけた

「わ、私、星空育代は、年甲斐もなく娘が若い
おちんぼ様達を独占することに嫉妬して
しまいました…
使い古したおまんこではありますが、どうか
皆様のおちんぼ様のお情けを頂きたい…
お、お願いします…どうか青臭い小娘で
はなく、この私のおまんこにザンメンをぶち
まけてください…どうか、私を皆様のおち
んぼ奴隷にしてください！」



「あははは!! 本当か!! 言いやがったよ!! おぼさん、どんだけちんぽに飢えてんだよ?」

「まあこんだけ熱心に頼まれちゃ嫌とは言えないな...!! じゃあ、おぼさんが俺らの言うこと聞く限りは、星空に手を出さないってことにしてもいいぜ」

「あ、ありがとうございます!!」

「よし、それじゃあ、おぼさんの肉奴隷記念に記念撮影でもするか...!! おい、星空!! おまえがシャッター押せ!! ほらおぼさん!! ダブルピースサインしながら笑え!!」

「いいえーい.....」

少年達は育代の元を集まると、やおら指を育代の膣と肛門にそれぞれ突っ込み、目一杯に広げた。そんな扱いを受けても育代は、言われた通りに、携帯で撮影しようとする娘に引き攣った笑いを向けるのだった.....





こうして私は解放され、代わりにお母さんが
クラスの皆の相手をする事になったのです……

お父さんが出かけ帰ってくるまでの間、お母さん
は家で服を着ることを許されなくなりました

唯一、身に付けるのを許されたのはエプロンだけ……

放課後ともなれば、何人も男子が私の家に
入り浸りお母さんを犯します

いつどんな要求にも逆らうことはできません

お尻を差し出し、おちんちんを舐め、時には
お尻をぶたれて悲鳴をあげたりもしてます

だけとお母さんは、それにじっと耐えていました

耐えているように見えました……



「なんだよ、おばさんもう濡れ濡れじゃん
そんなに俺らが待ち遠しかった？」

「そ、そうなの…おばさん恥ずかしいわ…」

「年増の性欲は底なしだなあ…
そら！ずっとこうして欲しかったんだろ？」

「アアッ！そ、そうよ！もっと奥まで舌を
入れてえ！もっと抉って！」



「ほくら、お待ちかねのソーセージだよ〜ん」

歳に似合わぬ親父ギャグを放ちながら少年は
育代の膣に肉棒を埋める
軽く甘い呻き声をあげるが、その尻はピストン
を催促するかのようにくねらせていた

「……ただいま」

立ちバックで犯され、嬌声をあげる母を見な
がら、みゆきが帰宅した

「お、お帰りなさい…み、みゆき、悪いけど
買い物…ううッ…行ってきてくれるかしら？
お財布とメモは、そこに置いてあるから…」

「……うん…わかった……」

「んっ…ふん…なんでもしてくれるのはいいけど…
さすがにおばさんひとりをクラスで共有するとなると
順番が回ってくるのが週に二度くらいしかないのがな…」
少年は育代を責めたてながらもぼやく

「まあ、その分最低四発は、犯らせてもらけどね！」

「だ、だからこんなに激しいの?…」

「そっさ、今日はこの後、アナルをたっぷりと
可愛がってやるぜ！」
そう言う少年は、さらに腰の動きを加速させる

「アアッ!お、おばさん壊れちゃうわ!」






その晩の星空家の夕食
みゆきはべじっとテーブルの上を
見つめていた

ほんの数時間前まで、ここで母と
少年が激しいセックスに汗だく
になっていた姿が、いまだに目に
焼き付いている……

その母は、先ほどまでのことが
なかったように笑顔で父に酌を
注いでいた



みゆきは、自分でもよくわからない粘ついた
感情を抱えたまま母を見る
自分を助けるために母が身体を張ってるのは
理解しているし、こんなことを考えるのは
恩知らずだとすら思えるのはわかっている
だがそれでも思わざるをえない

(…ねえ、お母さん…さっきまでお父さん以外
のおちんちんを啜えこんでいたのに、なんで
そんな顔ができるの？何故笑顔でお父さんと
話せるの?)



(私は覚えている…)
お母さんがさつきまで、たくさんのおちんちんに
囲まれていたこと
おちんちんをじごいて、舐めて、啜えて白い
お汁をいっぱいかけられていたこと
お汁をかけられるたびにお母さんは身体を
ぶるつと震わせていたこと
あれは…まるで…気持ちいいことを
されているみたいだった…)

「みゆき?どうしたの?食べなさい?」
「あ…うん…いただきます」

翌日も、育代は少年達に抱かれていた少年二人の肉棒が、育代の膣と肛門を交互に責めたて、その度にじゅぷじゅぷといやらしい音を立てている

どちらかが、育代の身体を突き上げるたびに育代は荒い息を吐き、顔を紅潮させる


段々と目は潤み、口はだらしなく開いて舌がだらりとさがる

「おばさんキスしてよ」

表情が蕩けきつてる育代の顔を見た少年が要求する
育代は、躊躇なく少年の口を吸い舌を絡めた

それに答えるように少年は、育代の乳首をつねりあげるとその身体がびくりと震えた





育代の肉穴を少年達の肉棒が激しく突き上げる
すでに三人とも、それぞれの股間に意識を集中し
絶頂へと向かっていた

少年のひとりが吠える

「ぐうッうッ！お、おばさん！どう？」

旦那のちんぽとどっちがいい？」

それに対するわ言のように育代が答える

「あなたよ！あなた達のちんぽのほうがいいわ！」

「そうかい！それならおばさんの膣内に射精して

孕ませちゃってもいいよね！」

「いいいいわ！孕ませてえッ！そ、それと、もうおばさん

なんてやめて！育代って呼んでッ！」

「よおし！イクぞ育代オッ！」

「アアッ！来て！来て！アアッ！アアアアッ！」

獣のように育代は絶叫し果てた……

育代はソファに寄りかかり、
荒い息を吐きながら
絶頂の余韻に浸っていた

「あっともうこんな時間！
これから塾なんだ
おい!! 星空!
後始末しといてくれ」

「あ……うん……わかった」

バタバタと少年達が、
出て行く

後に残された放心する母
とそれを見下ろす娘





「お母さん…起きて…早くしないと
お父さん帰ってきちゃう」

みゆきが、育代の手を取って起こそうと
したところ、育代の身体が、ぶるっと震え
て股間から黄金の飛沫が迸った

あまりのこのとに言葉を失うみゆき

（ねえ…お母さん、おしっこ漏らしちゃう
ほど気持ちよかったの？）

お父さんのことなんか、どうでもいいと
思えるくらいに気持ちよかったの？

クラスの皆とセックスするのは本当に
私のため？本当は…本当は、ただ気持ち
いいからじゃないの？）



育代は妊娠した
少年達は墮胎を許さず、むしろ妊婦との
セックスを楽しみにしている有り様だ

日々、腹を膨らませていく母を見ながら
みゆきは思った

(ねえお母さん…安定期に入るまではと
お休みにしてもらったつもりだろうけど
その間、皆の相手をしているのは私なんだ
これは私が自分で望んだことなの
もうお母さんひとりにおちんちんを独り
占めにはさせないよ…
私もまた皆に気持よくしてもらいたい…
大好きな皆のおちんちんに囲まれて
私とってもウルトラハッピー……)

END